

## シーン5

### 最後の触手壁と二人

ユリアーナ姫 「ふう、あのベッドでもう少し休めば良かったですわね」

アンナ 「あ、あんな変態触手がいる場所からは一刻も早く脱出すべきです……ああ、出口が見えましたよ姫様！」

ユリアーナ姫 「もうちょっと、ピロートークも楽しみたかったですけど。ああ、この通路を抜けるとダンジョンの入口でしたね。ただ……」

アンナ 「左右の壁は触手だらけですね。トラップを隠しめせずに……ここは私がお抱えして」

ユリアーナ姫 「私には魔法のドレスがあるので大丈夫ですよ。それより、アンの方こそ先ほどのベットの上的の同衾でだいぶ疲れているように見えますが……」

アンナ 「特に姫様との伽が壮絶で……」

アンナ 「ではなく！ ともかく私に続いて、前の出口だけを見て走ってください！」

ユリアーナ姫 「はっ、はっ……」

アンナ 「ハッ…… エントランスに出ます。あと、数歩でっ！」

ユリアーナ姫 「はっ、ふうっ…… 触手さんも途切れ…… えッ、解呪の、鏡…… きゃあっ！」

アンナ 「姫様!？」

ユリアーナ姫 「っ、アン、構わず行ってください！」

アンナ 「姫様を置いてなど…… 私は姫様の騎士です。命に代えても、アンが姫様を守ります！」

ユリアーナ姫 「ああ、間に合いませんでした……」

ユリアーナ姫 「でも、アン、今までのように、えっちなことをされるだけ、ですよ？」

アンナ 「えっ!？」

ユリアーナ姫 「あ、ああ、身動きが…… 触手さんの壁に、挟まれてしまいました、わ♡」

アンナ 「んっ、んう！ このっ鎧を…… ああっ、姫様のドレスにまで手をかけ…… ひっ!？ なな、この柱のように太いのも触手なのですかっ?」

ユリアーナ姫 「まあ、まあ♡、それは……ああ、言えばアンが気絶してしまうかしら♡」

アンナ 「ひゃ、あ♡ わ、私は騎士です、姫様を残して気絶など……ぢゆるッ!? ちゅっ、んッ口に無理矢理?……こんなに大きな先っぽ、舐められない……れりゅう♡」  
ユリアーナ姫 「はあ、む♡ 大きいのも無理はありませんわ。だってこの子はあ……女の子のに卵を植え付けるための触手さん、だそうです♡ ドロドロの潤滑液を吐き出しながら、子宮を押し広げて……レエロ♡ 10個でも、20個でも詰め込んでしまうつもり、ですって♡」

ユリアーナ姫 「ああ、この逞しい触手さんが私の処女を奪ってくださいるのですか……少々怖いですがこれも約束ですから、んあ♡」

アンナ 「姫様あ……はあ、はあッ! 姫様の清らかな子宮に、触手の卵を、などと……ぢゆるるッ! つくうつ、私は姫様の騎士なのに、なんでこんな……媚薬毒のせいだっ、くう、いままでのこと、子宮が思い出してえ♡ んちゅ♡ ああ、すみません姫様♡」  
ユリアーナ姫 「いいのです、アン。私もアンと触手さんの逢瀬を見て……その、はしたないですがとても興奮して妄想などしてしまいましたから……ちゅぽっ、それに触手さんの媚薬入りの精液を頂ければ、きちんとこの逞しいものを受け入れられるおマンコにしていただけですから♡ ちゅうう♡」

アンナ 「ああ、姫様と一緒に、触手にご、ご奉仕することになるなんて!? ちゅ♡ ちゅ♡ 姫ひゃま♡ ん、ひめしゃまとのキス思い出しちゃうなんて、私、変態、変態騎士ですみましえん♡ ちゅ、ちゅう♡ ちゅ……ぢゆるるッ♡ れりゅっ、れえる♡ はあむっ、ぢゅむうッ♡」

ユリアーナ姫 「くすっ、可愛らしい……指で幹を扱いて差し上げて、ヌルヌルとイボイボをしっかりと手の平に擦りつけ……はあむ、固あい先っぱを舐めまわひて……すっかり、触手さんへのご奉仕が上手くなって、私も見習わないと、れえろ♡ れりゅっ、はあむ♡ いけませんね♡……大きく、啞え、へ……ああむっ、はむうッ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「はっ、あ♡ 触手さん、ぴくぴくって喜んでいます♡ そろそろなのですね。ドロドロのザーメンを、私たちにぶっかけて♡ 子宮を拡げられても喜ぶ身体に変えて頂いて……れえろッ♡ 触手さんの子を孕んじやうんですね♡……ぢゅっ、ぢゅるう♡」

アンナ 「んっぶ、んぶう♡ 喉、当たってりゅ♡ 中で大ひく……ぢゅむうう♡ れりゅるっ、へりゅっ♡ ああ、出てくる、精液の匂いが濃くなって♡ 媚薬毒入り精液♡ 身体が喜んでるう♡ ぢゅっちゅ、れりゅう♡ 姫様、ひめしやまあッ♡」

ユリアーナ姫 「はあむ♡ アンったらすっかり触手さんのザーメンの虜ですね♡ 私も♡ 触手さんの孕ませ汁で体中におい付け♡ していただきたいです♡ ぢゅるっ、ぢゅむっ、ぢゅちゅっ、んむうッ♡」

アンナ 「や、やつ、やつぱり止めへえ♡ ぢゅっぶ、ぢゅるう♡ 私どんどんエッチな体になっていっちゃう……んむううッ!? 乳房を締め付けないれえ……はあむっ、んふうッ♡ 好きになっちゃう!? 触手の匂いも感触も好きになっちゃうから♡」

アンナ 「しゃきっぱ、んちゅ♡ 蜜みたいに粘液なめてもなめても♡ ぢゅるるっ♡ はあ、はあ♡ レロレロお♡ こんなっ、臭いのにつ、エッチな味もっど欲しいって♡ はあむっ、ぢゅるう♡ んうっ、ンンッ♡」

ユリアーナ姫 「いらひてくらひゃい、触手さん♡ ぢゅるるっ、んくんッ♡ 私たちのお口に、身体に♡ たくさんたくさん射精を…ん、ふふ♡ 出ひて♡ はあむっ、ぢゅっぷう♡ んぐぐッ、ぢゅりゅ♡ ぢゅうりゅうっ、ぢゅちゅっ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅうッ…ぢゅりゅるるるう——ッ♡」

アンナ 「んうぐッ!? 射精♡ んぐっ、むっふううう——ッ♡ 触手の精液♡ あ、ああ♡ 飲んだら戻れないのに!? んくんっ、ごきゅう♡ んぐっ、んふッ、んつく…ごっきゅう♡」

ユリアーナ姫 「んぷっ♡ 体の中も外もドロドロでっ、私♡ 達してしまいます♡♡♡!?」

アンナ 「ぶはっ、あああッ♡…んぷううッ! ひめしゃま、姫しゃまのイってる声、なんへ…あああっ、んはあッ♡ もう我慢できないい、せいしーおいひい♡♡♡ ドロドロの精液、体中にぶっかけられていくうううう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「はあ♡ はひい…ん、ちゅ♡ とっても熱い精液を頂きありがとうございます♡」

アンナ 「んぷっ♡…んんっ♡ ああ、飲んじゃっちゃ…んっ!? おちんちん、ああ、姫様の前なのに、あそこが熱くて、こんな、触手ちゃんぽほしくて身体がうずいてえ♡」

ユリアーナ姫 「はあ、はあっ♡ はあ♡♡♡ 私の騎士も準備できて、ああ♡ これで、このごつごつで太い触手さんで貫いてくれるんですね♡」

アンナ 「ひうっ♡ あ、あ、あ♡ 私の、姫様のあそこに♡ 私、姫差をお守りする立場なのに♡ 目、離せない♡♡♡」

ユリアーナ姫 「いいのですよ私の騎士。手をつないでくれるだけで充分です……あ、んんっ♡ オマンコなでられて私のお汁あじみされちゃって♡……一緒に触手さんのおちんぽで気持ちよくなりましょう♡」

アンナ 「は、はい、謹んでっ！ んむっ♡ ちゅ、ちゅ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ふふ、アンも発情してるのが体温でわかりますね♡ ちゅ♡ 触手さんも大好きな大きなおっぱい、私もご相伴させて……れりゅっ、んっふ♡ は、あ、熱くて柔らかい……触手さんの白濁液でぬるぬるでとっても美味しい♡」

アンナ 「んあっ、ひめしゃま♡ んむううっ、んっふうッ！ は、は、入ってくりゅ♡……ぢゅりゅ♡ 触手が、中でせーし塗りつけながら♡ 私のオマンコにずぶぶつつて♡……あ、ああんッ♡」

ユリアーナ姫 「わ、私の方も……ん、あ♡ 処女オマンコをほぐして……あう♡ ハーゼンバイン王国第一王女、ユリアーナの純潔を、散らしていただけるんですね……ゆっくりと、中に……はあふっ♡ あ、あ、おっきい♡ ぷちゅって♡……んっふうーッ♡」

アンナ 「う、あ♡ ぐすっ……姫様、オマンコでぐっぽりと触手を呑み込まれて……せめて私も姫様の騎士としてえっ♡ こら、私がしゃべちえるとちゅんんっ♡♡♡♡……！」

ユリアーナ姫 「触手さんも我慢できなかったみたいっ♡ ああ♡ 中で♡ 初めて殿方を迎えるのにこんな感じッ♡……ああ♡ し、子宮っ♡ 子宮が広がっていくの、おお♡ お、お城で習った子作りとじえんじえん違ひまひゅ♡ あふうんッ♡ あ、あ、そこ……ああああッ!？」

アンナ 「ひ、ぎ♡ ノルノルの、丸い、の…… おおお♡ 入りゅっ、押し込まれへりゅッ♡…… やらやらやらあ♡ 赤ちゃんのお部屋に触手卵入ってる♡♡♡」

ユリアーナ姫 「はああっ、はああーっ♡ 1個お♡ ん、ふふ♡…… 怖くて気持ちよくて苦しくて愛おしくなるの♡ 不思議な感覚ですね♡ ん あっ♡」

アンナ 「はひっ…… ああ、お、おぞましいのに、気持ち悪かったのに、オマンコがジンジンと疼いへきて♡♡…… もっと欲しくなっちゃう♡ ひ、ひめしゃま♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あ、あんッ♡ ダメですよ、だってあなたのお顔…… 私と同じでいやらしいくトロけてしまっていますもの♡ あ、んッ♡ 卵、入ってくるたびにおつゅびゅっびゅってなっ♡」

アンナ 「あぐッ、ああッ♡ ひ、姫様!? オマンコ見ないれえっ♡ はうっ、ああッ♡ イチャうところ見ないで下さい♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ちゅ、ちゅ♡ ああ、新品だったオマンコが子作り穴に変えられてゆきますわ♡ 触手の卵を頂いて、もの欲しそうに腰を振ってえ…… あふんッ♡ 私の騎士、もっとえっちな表情見せてください♡…… ちゅ♡」

アンナ 「ちゅ、んちゅ♡ 私もうなにがなんだか♡ ああ♡ ひめしゃま、ひめしゃま♡」

ユリアーナ姫 「もっと素直になってもいいんですよ。えい♡ クニ、クニゅっ♡ 乳首もこんなに張って♡」

アンナ 「は、ああッ♡ 乳首伸ばひちゃ…… いうううう——ッ♡ あひっ、んふうッ♡ は、はひ、姫ひやまッ♡ アンは姫様に、触手におっぱい弄られてイっちゃいます！卵、触手卵植え付けられるの気持ちです♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あああ、あ、んふうっ♡ 卵、あはっ♡ ふ、2つ……3つ♡ いい、いくつ植え付けられるのでしょうか、ね……あひいっ♡ は、あ……タマタマの中、には……100個は詰まってるっしやる、ようですが♡ あ、んっ♡ 入っちゃ……あ、ああっ♡」

アンナ 「ぶはあッ♡ 卵せつくしゅでいくうっ♡ おふっ、ンググウウッ!? あふっ、ああッ♡ お腹パンパンなのに媚薬毒のしえいでえ♡ どんどん気持ちよくっ♡♡ あっはああああ——んっ♡」

アンナ 「はあっ、あっ、あ♡ 突き上げるの待っへえ♡ 子宮で卵潰れひやう♡ あ、あんっ♡ し、子宮の中でっ、ごちゅごちゅぶつかっへ、んはあッ♡ うううっ、内側からも感じちゃうのおおっ♡ こんにゃ、こんにゃの覚えたら勝てなくなりゅ♡ アンは、騎士なのに触手見るだけでお股ぬりやしちゃう変態になっちゃ♡ んあっ♡ うううっ、姫ひゃま♡ ひめしやまの騎士なのにエッチになっちゃって♡ 申し訳♡ あ、ああ♡ あああ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「んっ、ああッ♡ もう、もう、気持ち良さそうに鳴いて……ちゅっ♡ あ、ああッ♡ 私まで感じてしまいまひゅわ……は、あッ♡ 触手のおちんぽでっ、子宮を叩かれながら……あふっ、ああッ♡ あ、あ♡ アンの子宮の中を、妄想しながら……ひうっ、んふううッ♡ ヌルヌルの卵でいいっぱいの、えっちな子宮♡ はっ、ああ、子宮、子宮♡ ひぐうッ♡ あ、あ、あたたか、そう……はあふっ、あああッ♡」

アンナ 「んひいッ♡ は、はひ♡ 卵、植え付け、きったの……んあっ♡ ぴしゅとしゅごい♡♡♡、いまひゅ♡ はあひっ、んはあッ♡ じゅっぽじゅっぽピストンひて、ああッ! 射精!? 卵に精子びゅーってしちゃう準備してるう……あ、あ、ああッ♡」



ユリアーナ姫 「ああっ、ああッ♡ あの熱い精液♡ 卵でいっぱいになった私たちに注いで♡ んちゅ♡ 周りの触手さんたちも♡ ふう、ふあっ♡ 先走りのお汁いっぱいご馳走してくれて♡♡♡」

アンナ 「ああっ、ああッ！ 卵育って!? お腹もっとパンパンひないれっ♡ イってるの!? おほっ♡ 身体が精子おねだりしちゃってるう♡♡♡ これ以上、イったらあ、あ、あっ♡ あーっ♡」

ユリアーナ姫 「ああ、触手おちんちんに精液上ってきてるのがわかる！ 二人一緒に♡♡ ああっ、んふうっ♡ 周りの触手さんも一緒に♡ 種付けしゃせい♡♡♡!!! んお♡ んひう♡♡♡！ どぴゅどぶって♡！ 卵に、子宮に精液あひがとうございます♡♡♡!!!」

アンナ 「ああああ♡♡♡ ひめしやま!? はしたないお顔でイってらしゃって……んひい、私もイっちゃいます！ 触手せーしになかもそともいっぱいしゃせいしてもらって♡ へくううっ——♡♡♡!!」

ユリアーナ姫 「あ、あ♡ せーしいっぱい♡！ んぶっ♡ 私イくの止まらない♡♡♡ 触手さんおちんちん！ もっと、もっとくだしや♡♡♡!!!」

アンナ 「お、お腹が膨れるっ、重い……は、うう！ 中に卵詰まってるのっ、もう注ぎ込まないれ！ 中出ひ気持ちよしゅぎておかしくなりゅうっ♡」

ユリアーナ姫 「ああ♡ ああんっ♡ 妊婦さんのお腹に、連続でお射精だなんて……んあ♡ 元気な触手さん、ですわね……ひゃ、う♡」

アンナ 「あ、あ、溢れてるのっ、もうピストン止まっへえっ♡ あ、あ♡ ああ……あ、んっ？ 止まった……？」

ユリアーナ姫 「ふうう♡ ふうう♡ あ、ピックって動きました…：触手のあかちゃん…：ああ♡、ドキドキしますね♡」

アンナ 「ま、待って、心の準備が♡ んうううっ、んふうううっ！ あ、あ、触手抜かないれっ、太いのを抜かれたら…：あ、あ、本当にやりゆっ、赤ちゃん、ん♡ あっ♡」  
ユリアーナ姫 「ひっ、ああッ♡ あ、あ、プチプチって音♡ すう、はあ…：ひゃッ♡ 子宮の入口♡ 通って、ああ♡ 生まれちゃううう♡♡♡♡」

アンナ 「んん♡ うっ♡♡ ひめしゃまお氣を確かに♡!? んああ♡♡ 卵っ、私もおおッオマンコ、があっ…：ひ、拡がりゆ…：また産まれりゆ♡ ぶびゅぶびゅっ、産むだけでイっちゃって私もお♡♡♡」

アンナ 「っはあッ！ ああッ!? 触手赤ちゃんいっぱい、あ、あ♡ うそ、まだお腹こんなにいいおっきいの!? あひいん♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ひゃ♡ 赤ちゃん、生まれたばかりの触手さんがっ…：ん、ふああおっぱい吸って!? あふんッ♡」

アンナ 「んー!? んはあ♡ みるく!? ミルク出てる!? 触手赤ちゃん産みながらミルクしゅわれて♡♡ ひあ♡ んん♡っ♡♡♡!?」

ユリアーナ姫 「ああ、私もおっぱい出ちゃって♡ ん♡ 乳房に張り付いて一生懸命ミルクしゅって、ふふ♡ んはあ♡ 子宮の触手さんも早くミルク飲みたいって♡♡♡ ひあ♡ さっきより産まれるのはやくううっ♡♡♡♡!?」

アンナ 「あ、うう♡ ひめしゃま♡ ああ、水風船みたいにお腹膨らまして、触手お産みに…：んあ♡ だめえ!? おっぱい二つだけだから!? そんなにたくさんは♡♡♡」

アンナ 「ひあっ♡ あ、ああ♡ でも、もうすぐ?... まで、おい!! それは... さっき私たちに卵産みつけた... あ、あ♡」

ユリアーナ姫 「んんっ♡ 産卵ちゃんぽさん♡ ひゃあん♡ も、もう一度ですか!?! ふう、ふあ♡ ああ、さすがに壊れてっ、んんんっ♡♡♡♡」

アンナ 「ひああ♡ 赤ちゃん掻き出してまた入って!! まさか、その卵袋にはいつてる卵全部産み付けっ♡♡♡ んおっ!! んんっ♡♡♡... ふうっ、ふああ♡ さっきより大きいッ♡ こ、こっちが本番なの♡♡♡!!」

ユリアーナ姫 「ちゆる♡ あむ♡ ん♡ 今回は明日の日が昇るまで見たいですっね♡ アン、大丈夫。私の騎士は♡ これぐらいでえっ、んおっ♡ でも、私はちょっとはしたないところ、見せるかもしれません♡ あひっ♡ がんばりましょう♡」

アンナ 「ひ、日が昇るまでっ!! あ、あ♡ こんな触手のっ、精液付で苗床を!! んん♡ わ、私は姫様の騎士っ、ですが♡ お、おひりまで入っへ... んお♡♡♡ 両方、突っ込んじゃらめえっ♡ おひっ♡ んひい♡♡♡!!」

アンナ 「媚薬毒のせいであ、全部気持ちいいに変わって♡ オマンコもお尻もおっ、だめ、もう入れないで!! んおっ♡ 順番にじゅぽじゅぽ♡ んあっ、ああッ♡ 卵産みつけられる袋になっちゃう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「あひいっ、せーしいっぱい♡ んぷっ♡ ザーメンプールみたいに精子の海に浸って触手赤ちゃん生むのっ♡ これしゅごい♡ ま、また産んじゃう!!」

アンナ 「ひッ!?! 姫ひゃまあッ♡ ああ、私もまたいっぱい産まれるううう——ッ♡」

ユリアーナ姫 「っ、はあッ、ああッ♡ お乳が張ってるけど、赤ちゃん触手の皆さん元気で♡ 乾く暇も♡ あ、んうッ？ そ、そちらは乳首ではなく、クリトリスですのに：は、あああッ♡」

アンナ 「っ、姫様お気を確かにッ！ って あ、あ、まさかまた、ふたなりに変化ひめるのでは…：んくっ、ああ♡」

ユリアーナ姫 「んっ、まだ恥ずかしいですね♡ 私のおちんちん♡ …：はお、はあ♡ 触手さんの計らいで私でも精液、んあ♡ アンに種付けできるようにしていただいたみたいです♡」

アンナ 「ひっ、姫様？ え、えっ、種付け…：あ、あ、姫様あっ♡ 私はまだ、返事を…：んううッ♡ あ、あ、産んだばかりのオマンコにいきなり突っ込んだじゃ、んううッ♡ あふっ、ああ♡ まだ中に卵残ってりゅのにい♡ チンポの先っぱ♡ 子宮グリグリらめえっ♡」

ユリアーナ姫 「はっ、あ♡ 膣の柔らかさと卵の不気味さが、たまりません♡ んっ♡ ああ、もう一度アンのおマンコを味わえるなんて♡ んあ♡ 沢山種付けして沢山産みましようね♡」

アンナ 「んあ♡ ひめしやま!? ひめしやまあ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「んっ、んうっ♡ アンのおわトロオマンコ♡ 触手の赤ちゃんのおかげで前よりもドロッドロに蕩けちゃっへ…：あ、あ♡ 子宮まで入りそう♡ ごめんなさい、さきにあやまっておきますね…：」

アンナ 「んお♡ んん♡ え、え、ええ!？」

ユリアーナ姫 「はあ、はあっ♡ こんなの、こんな気持ちいいの止まらなくなりそうです♡」

アンナ 「あああッ♡ あああッ、あひ、んひいッ♡ ひゃやい!? ひめしゃまのオチンポ!? 子宮の中までえ♡ ひゃいつてきて♡♡♡!」

ユリアーナ姫 「んひい、触手さんに入れられてえ♡ アンに出し入れして♡ 止まりません♡ おちんちん、オチンポしゅてき♡♡♡」

アンナ 「ああんッ♡ 姫様の精子!? ダメなのに、ああ♡ おちんちん思い出しちゃった♡♡♡ 姫様のふたなりチンポの味、思い出したら♡ 私、わたしい♡♡♡!!!!」

ユリアーナ姫 「ふああ♡ あはっ♡ アンったら脚でがっしり捕まえちゃって♡ ええ、ええ♡ 奥の奥まで種付けして上げます、ね♡」

アンナ 「あ、ひいッ!? ひぎッ、あああああッ♡ はあッ、ああッ♡ ばちゅんっ、ばちゅんってえ♡ おお、おおッ♡ 姫ひゃまのチンポ、奥まで……しし、子宮をブッ刺してしまっておりまひゅっ、あああッ♡ 種付けプレスう♡ ありがとうございますひゅっ、ありがとうございますひゅうッ♡♡♡ ちゅ、う♡」

ユリアーナ姫 「ええ、ええ♡ とってもかわいくてエッチで素敵ですよ私の騎士♡ ご褒美に、子宮へ直接ザーメンを注いで♡ 触手赤ちゃんいっぱい孕ましてあげます、から♡……はあ、うんッ♡」

アンナ 「あ、ああ♡ 姫ひゃまのオチンポと触手チンポなかですれっ♡ 擦れてえ♡ 下さいドロドロザーメンを注いで子宮にキスひながら溺れるぐらいザーメンびゅうっ、びゅうっうっつて種付け射精くだひゃあああ——ッ♡」

ユリアーナ姫 「っ、ああ♡ ア、ン……おひんひん出ちゃううううう——ッ♡ 出りゅっ、いくううッ♡ あ、ああッ、出ちゃ……んはあああ——んッ♡」

ユリアーナ姫 「あふっ、ああ♡ アンの子宮にふたなりチンポでキスしながら出へりゅう♡ どくんっ、どくんッ♡ 種付け射精♡ イきますうっ……ああ♡」  
アンナ 「姫様のせーし♡ あ、あ♡ いっぱい♡ あひゅいつ精子♡ 卵にびゅびゅってかかっているのわかる♡ 種付け射精ありがとうございませうっ♡♡♡」

アンナ 「あ、頭の中、真っ白れひゅ……イキひゅぎておちんちんのことしか……んくっ、んはあ♡ あ、え……ああッ!? また、産まれちゃう……あ、がッ……姫様が種付けした触手赤ちゃん、産んじやううう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ひうッ!? わ、私も……触手さんにいただいた精子で卵が……あふんッ♡ 子宮が熱いッ……はひっ、んはあッ!」

ユリアーナ姫 「あ、あ、アン一緒に! また、触手さんの赤ちゃんいっぱい♡ アンと一緒に噴水みたいに♡ 一緒に苗床出産でイっちゃいましょう♡♡♡」

アンナ 「姫ひやまッ! ちゅっ、あ、ああ♡ 姫ひやまのふたなりチンポ、抜けっ!? んひい♡ アンもっ、騎士失格ですが、苗床としてならっ♡ 一緒にしょくしゅしやんの、姫様の赤ちゃん産んでっ♡ イきましゅう♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ああんッ♡ 出る出りゅ出る、出りゅのおッ♡ 触手の赤ちゃんぶりゅびゅる♡ 産まれ……りゅううっ——ッ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「っはあああッ♡ は、あ……赤ちゃん止まりまひえんわっ♡ おおっ、おおッ♡!? 産まれながら、お、大きく……ひ、ぎいいッ♡」

アンナ 「ひッ、ああッ! 私もっ、お乳があッ! ミルクおちんちんみたいにどびゅどびゅ止まらなくッ♡ ああっ、吸われへりゅッ♡ 触手赤ちゃんにお乳のまれていく♡ あひいい♡」

アンナ 「戻れなくなるぅ♡ ひめしゃま戻れなくなっちゃいます!? 触手産むの気持ちよすぎて♡ ひゃん!? 卵植え付けられるのもっ、精液中出しされるのもっ、せーしプー  
ルで出産アクメしちゃうのも、しゅごいっ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「ああんっ♡ もう周りは私たちが産んだ赤ちゃんと精液でいっぱいです  
ね♡ もっとおっぱい吸って、卵植え付けてくださいな♡ はあんっ♡ 私も、もっと犯  
して戻れなくして下さいっ♡♡♡」

アンナ 「ひ、姫様!? あ、姫様のふたなりチンポ、また!? ん、んんっ♡ アンは、ア  
ンも一緒ですからっ! アンの中で、おっぱいでも気持ちよくなって、いっぱい種付け射  
精してください!」

アンナ 「んはぁ♡ で、でも、ちょっと、あ♡ ああ♡ 手加減していただけると♡  
ああひいっ♡ 朝まで身体もぢませんから♡ あ♡ あっ♡ あああ♡♡♡」

ユリアーナ姫 「アンったらこんなに締め付けて相変わらず、嘘が下手ですね♡…  
ふぁっ♡ 触手さんもこれから本番みたいです♡ ああ♡ 沢山沢山かわいがって、  
孕ませて、種付けしていただいて、触手赤ちゃん生ましよう♡♡♡」

アンナ 「んひい♡ 前後両方♡♡ んぁっ♡ あ、あっ♡ あああ♡♡♡!…!」

シーン6

ハッピーエンド？

アンナ 「んっ……もう入りましえん……あ、あれ？」

アンナ 「姫様、朝陽が！ 本当に日の出とともにダンジョンを出してくれるとは、触手もなかなか義理堅い……、あの、姫様？」

ユリアーナ姫 「アン。貴女は外へ。私は、このダンジョンに残りますわ」

アンナ 「残る……な、なぜ触手屋敷などに！？ 考え直してください姫様っ！ お国のことも、ここからだというのに……」

ユリアーナ姫 「もう、国を取り返すことは考えておりませんの。私とアンが他国へ助けを求めたとしても、結局何も変わりません。むしろ事態は悪化しますわ。これまでの放浪で、アンも薄々は感じていたでしょう？」

アンナ 「あ……」



ユリアーナ姫 「あと、触手さんとの相性がとてもよかったので♡ 初めてを捧げた相手に嫁ぐとは決めていましたが……まさに運命以上の出会いですわね！」

アンナ 「相性っ！？ ひ、姫様ぁ……うう、一体なんと説得すれば……っ？ その触手！ 無関係を装って覗かないでほしい！ ま、満更でもなさそうに照れるな、この下劣なモンスターめえっ」

ユリアーナ姫 「あらあら、アンの八つ当たりだなんて珍しいですわね♪ ふふ……というわけで、アンはアンらしく、自由に生きてください。主からの最後の命令です」

アンナ 「……かしこまりました。では私は、ご命令通り自由に生きましょう。とても、言うと思いましたが！ 私も残りますよ姫様」

ユリアーナ姫 「えっ？」

アンナ 「私の主は姫様のみ。貴女に一生着いて参りますよ、我が君。我が心の王ユリアーナ様」

ユリアーナ姫 「私の騎士……」

アンナ 「それに、こんなへ、変態触手に任せられません……あ、あんな激しいの姫様だけにまかせたら、わ、私が半分は……」

ユリアーナ姫 「アン、わかりました。私はもう触手さんのお嫁さんではありませんけど……アンの旦那様としても、頑張りますね！」

アンナ 「だ、旦那様！？」

ユリアーナ姫 「まあ、触手さんも賛成なのですって♪ これは、大家族ができそうな予感がいたしますわね♡」

アンナ 「ま、まあ姫様が幸せそうなら。あ、それから触手っ姫様を泣かせたら、いや夜はともかく、私が承知しないからな！……あと……ふ、ふつつか者だが、よろしく、頼みますっ」